



家庭紙

誰も知ろうと しなかつた「拭く紙」

身の回りを拭くものといえば、ティッシュペーパーなどの「紙」も身近な存在だ。水回りでいえば、トイレトペーパーは現代の必需品と言っている。そこで、家庭で使われる紙の歴史、特にトイレトペーパーを中心に「家庭紙史」を研究する関野勉さんに、国内外のお尻を拭く紙や道具についてお聞きした。



インタビュー
関野 勉さん
家庭紙史研究家

Tsutomu Sekino

1934年青森県生まれ。文具の卸売業、万年筆のインクメーカー、防虫剤・殺虫剤の販売会社を経て、1970年に製紙会社へ転職。その後、機械すぎ和紙連合会で勤務。世界65カ国を回り、トイレやトイレトペーパーに関する史料・資料や各国のトイレグッズを集めるなど、家庭の紙の歴史を研究している。



12〜13世紀から 紙で拭くように

——家庭における紙の歴史を研究したきっかけをお聞かせください。

文房具関連の仕事をした後、1970年（昭和45）からトイレトロール（注1）とティッシュペーパーを製造する製紙会社に勤めたのですが、3年後の1973年（昭和48）に第一次オイルショック（注2）が起きました。あのときは日本中が混乱しましたね。もちろん、紙の在庫はすつからかんでした。

ところが、オイルショックが終わって落ち着くと、「どうしてトイレトロールはこの幅なんですか？」「なぜミシン目が入っているんですか？」といったいろいろな

問い合わせがありました。ところが、答えられなかったのです。あって当然と思っているのに誰も知らないし、歴史について書いたものもありません。

そこで自分で調べはじめたのです。海外にも足を運び、ざっと65カ国は訪ねています。

——日本ではいつから紙が使われていたのですか？

手漉きの紙は、紀元前に中国で発明されました。前漢時代（前202〜後8）とされています。日本に伝わったのは、『日本書紀』によると7世紀です。610年（推古18）に高句麗から渡来した僧・曇徴（ちんぎょう）が伝えたとありますが、実際には4〜5世紀には伝わっていたと考えられています。

紙には、書写、包む、拭くなどの用途がありますが、トイレトペーパーとして紙が使われた可能性を示す記録が6〜7世紀の中国の家訓書『顔氏家訓』にあります。訳し方によって異なるようですが、私は「文字の書いてある紙は、鼻をかんだり、^{かわ}厠で使わないこと」と解釈しています。ですから、この頃すでに紙がお尻を拭くことに使われていた可能性があるのです。

——日本では、紙を使う以前はどうしていたのでしょうか。
紙を使う前は、^{ちろうぎ}籌木を使っていた

（注2）オイルショック

1973年の第四次中東戦争をきっかけに、アラブ産油国が原油減産&大幅値上げを行なったため、石油輸入国に失業・インフレ・貿易収支の悪化という打撃を与えた事件（第一次オイルショック）。また、1979年のイラン革命に伴って産油量が減り、原油価格が急騰した（第二次オイルショック）。

（注1）トイレトロール

使用後の清拭に用いられる専用紙で、ロール状の巻紙のこと。今はトイレトロールをトイレトペーパーと呼ぶことが一般的。本稿では場合によって「ちり紙」と「トイレトロール」を使い分けた。



平安時代末期から鎌倉時代初期の作とされる「餓鬼草紙」。
排便している周辺に「紙」が散乱している(国立国会図書館蔵)

世界の「お尻を拭く道具」

①指と水	インド、インドネシアほか
②指と砂	サウジアラビアほか
③小石	エジプト
④土版	パキスタン
⑤葉っぱ	ソビエト(当時)、日本ほか
⑥茎	日本、韓国ほか
⑦とうもろこしの毛・芯	アメリカ
⑧ロープ	中国、アフリカ
⑨木片・竹ベラ	中国
⑩樹皮	ネパールほか
⑪海綿	地中海諸島
⑫布切れ	ブータンほか
⑬海藻	日本
⑭雪	スウェーデン
⑮紙	各国

西岡秀雄著『トイレトペーパーの文化誌』
(論創社 1987)より



飛鳥、奈良、平安時代までお尻を拭く道具として使われていた「籌木」(提供:関野 勉さん)

ました。用便の後にお尻を拭う木片のことです。「かき木」とも呼びます。飛鳥、奈良、平安時代まで使っていたようですが、高貴な人と庶民では籌木のつくり方も違っていたようです。高貴な人が使う籌木は角を削って滑らかな形に加工して使いました。中国は木ではなく竹だったそうです。

——使い捨てですか？

洗って再利用することもあったようです。籌木はお尻を拭くだけでなく本として使ったり、荷札として使ったりもしていました。ですから鉋で削って二回使ったもの

もありますし、一回で捨てたものもある。籌木といっても木を割るわけなので、いろいろな形があります。

——日本で実際にお尻を紙で拭くようになったのはいつですか？

12世紀後半の絵巻に『餓鬼草紙』があります。これは六道のうち餓鬼道に堕ちた者を描いたものですが、高下駄を履いて排便しています。そして人間と餓鬼がいて、その周辺に紙が散らばっているのです。『餓鬼草紙』には詞書がないので想像するしかありませんが、平安時代が終わって鎌倉時代あたりから

りからはお尻を拭く道具として紙が使われるようになったようです。つまり中国では6世紀頃に、日本では12〜13世紀頃に、お尻を紙で拭く習慣が生まれていたと考えるとよいでしょう。

ただし、庶民が使えるようになるのはずっと後の江戸時代からです。ちり紙の「浅草紙」が有名ですね。古紙を溶かして漉きなおした、あまり質のよくない再生紙ですが、庶民の日用紙として多く用いられました。

紙ばかりではない 外国の拭く道具

——各国を巡ったとのことですが、お尻を拭くのは紙が主流ですか？

いえいえ。これが実にさまざまなので拭いています。「お尻を拭く道具」は世界中で15種類ほど確認されています。

私もお世話になった慶應義塾大学名誉教授の西岡秀雄さん(注3)が著した『トイレトペーパーの文化誌』(論創社 1987)には、「指と水」「指と砂」「小石」「土版」「葉っぱ」「茎」「とうもろこしの毛・芯」「ロープ」「木片・竹ベラ」「樹皮」「海綿」「布切れ」「海藻」「雪」「紙」が挙げられています。

古代ギリシャ・ローマ時代の地

中海諸島では海綿を使っていたそうです。私もキプロス、ギリシャ、トルコ、イタリア、フランスは海綿だったことを確認しました。

ところが、エジプトは海綿ではなく、砂漠に落ちていた「小石」を使っていました。ピラミッド観光の男性ガイドたちは、ポケットに小石を数個必ず入れていました。なぜかわかりますか？ 砂漠に落ちていた小石は熱いので、拾ってすぐに使えません。だからポケットで冷やしておく。使い終えたら捨てますが、灼熱の砂漠なので自然に消毒できる——というしくみなのです。

——合理的ですね！

水がないので洗えませんからね。小石なら砂でこすられ、熱で殺菌されます。エジプトのトイレで紙を使っていると「君は日本人だね」と言われました。世界中の人が紙を使っているわけではないのです。

西岡さんの『トイレトペーパーの文化誌』が出版されたとき、世界人口は約55億人。西岡さんは「世界人口の1/3しか紙は使っていない」と書いています。ただし、今の生産量(約3400万トン)に鑑みると、世界人口の1/2、つまり35億人くらいは紙を使っているはずですよ。

(注3) 西岡秀雄さん

1913-2011。慶應義塾大学名誉教授、大田区立郷土博物館館長、日本トイレ協会名誉会長。専門は考古学・人文地理学。



(上)1904年の消印があるフランスの絵葉書。トイレのマナーを描くなかにはトイレットロールも見られる(下)アメリカでは政治家、特に大統領に関しては肖像権・プライバシー権の主張が大幅に制限されていて、こうしたトイレットペーパーも販売される(提供: 関野 勉さん)

トイレットロールは アメリカ生まれ

— 今、日本でお尻を拭く道具といえどトイレットロールですが、かつて主流だったちり紙から切り替わったのはいつですか？

第一次オイルショックのときは、まだちり紙の方が多く使われていました。当時は紙を巻いてミシン目を入れる機械がまだ少なかつたからです。ちり紙なら重ね切りすれば済みますからね。トイレットロールの生産量がちり紙を逆転したのは1977年(昭和52)です。トイレットロールに切り替わった理由の一つに「トイレの水洗化」

があります。

— そもそもトイレットロールは、いつ、どこで発明されたのですか。

それが長い間なぞでした。イギリスのオックスフォード大学出版局が刊行する『オックスフォード英語辞典』にトイレットペーパーの記述があるのですが、「トイレットロールは誰が開発したのかかわらない」と書いてありました。私が調べたのは5、6年前ですから改訂したかもしれません。

ずっと調べていて、ようやくアメリカのセス・ウェラーという人が、自分で特許を取得して自らトイレットロールをつくっていたことを突き止めました。アメリカに手漉きの紙が渡った

のは1690年で、1817年に機械式の製紙に切り替わります。セス・ウェラーは1838年に生まれました。1871年、セス・ウェラーは「Improvement in wrapping-papers」という名で特許「Patent US 117355」を取得します。「紙にミシン目を施してロール状にして用意する」というもので、これがトイレットロールの基本特許となりました。

セス・ウェラーは、1877年もしくは1878年にA・P・W (Albany Perforated Wrapping Paper Co.) という会社を設立し、トイレットロールを製造します。A・P・W社のトイレットロールがヨーロッパに輸出されていたことはわかっています。

私の手元に、1904年の消印が押されたフランスの絵葉書があります。トイレマナーの絵のなかにはトイレットロールがしっかりと描かれていますので、セス・ウェラーの発明が海を越えたのではなにかと想像しています。

白が好まれるのは 天然にない色だから

— 日本で最初にトイレットロールが製造されたのは？

現存する史料によると、192

4年(大正13)です。東京都紙商組合の「和紙随想録」には、土佐紙株式会社芸防工場(現・日本製紙グループ本社)が外国航路の汽船に積み込むため、トイレットロールをつくる機械を設置したと記されています。

— 日本のトイレットロールも100年近い歴史があるのですか。

消費量は他国に比べてどうですか。標準ですね。日本人の一人当たりの年間消費量は約8kg。幅と厚さ、長さによって変わりますが、トイレットロール1個を150gと考えると、年間で53個。アメリカ人は9kg使っています。これはかなり古いデータですが、フランス人は3kgだそうです。かつて主食はパンと肉でしたから、ウサギの糞のようにうんちがコロコロしていてお尻が汚れにくい。だから使用量も少なかったといわれています。ところがドイツ人は結構使っていて、トイレットロールの製造も盛んです。

— 国によってトイレットペーパーの色に違いはあるのでしょうか。

アメリカでは1930年代に色つきのものが登場します。また、海外では古紙をそのまま使用した黒っぽいものを多く見ます。

日本の昔の手漉き和紙は原料となった楮こうぞの色ですし、浅草紙はね



(上)江戸時代に葛飾北斎が描いた浮世絵『富嶽三十六景 駿州江尻(すんしゅうえじり)』。風に舞い上がる「ちり紙」が描かれている(山口県立萩美術館・浦上記念館蔵)
(右)歌川貞秀筆『風流職人尽 紙漉』。江戸時代後期に描かれたとされる(富士山かくや姫ミュージアム蔵)



ずみ色でしたが、徐々に白色が好まれるようになりました。
紫色が高貴な色とされているのは天然には存在しない色だからです。白色も同じで、真っ白くできなかったからこそ望まれた。薬品のなかった時代、白くするには水や雪にさらすしか方法はありませんでした。薬品で白くできるようになったのは昭和50年代からです。今は柄物やピンク色を好む人もい

ますが、母親が赤ちゃんの便の状態を気にしているように便は健康のバロメーターですから、見えやすい白色の方がよいでしょうね。

水がなければ 紙はつくれない

海外を訪ねて、どんなところで日本との違いを感じますか？
トイレットロールをつくれれない

国があることです。イランやイラクの北方には水があるので紙はつくれる。けれど砂漠の国、例えばサウジアラビアやアフリカの国々では無理です。だからサウジアラビアは砂と水でお尻を洗うのです。紙は水がないとつくれません。
そして、海外にはトイレットペーパーを買えない人たちもいます。特にインドではとても高価なので、ホテルのトイレットロールが日本



トルコ・エフェソス遺跡の公衆トイレに腰掛ける関野さん。イスラム教徒は男性もトイレで座るという(提供:関野 勉さん)



日本の高級ちり紙のラベルや包装紙。昭和30年代頃のもの(提供:関野 勉さん)



楳の手漉き和紙。戦前のものと思われる。関野さんの父親が保管していた(提供:関野 勉さん)

の1/3くらいの大きさしかない。一人か二人が一晩泊まるのに必要な分しか置いていません。そう考えると、日本は恵まれていますね。
「拭く」行為と紙については、
どうお考えですか？
印刷の「刷」は漢字です。「する、こする」のほかに「はく、ぬぐう、きよめる」という意味もあります。刷新とは「拭いて新しくする」ということですが、中国には「拭」という文字はありません。実は、「拭」は国字なのです。
「路の葉」の語源は「拭く」だと私は考えています。金田一春彦さんが『ことばの博物誌』(文藝春秋1966)で、対馬の豪家のトイレを借りたときに新しい路の葉がうず高く置いてあったのを見て「紙を知らなかった昔の人は、用便のあと始末はフキの葉を用いたもので、それでフキの葉というのではなからうか？」と書いています。
「路」拭き」と考えたのですね。
日本はヨーロッパよりも古くから紙を知っていますし、使っています。しかし、「拭く紙」が脚光を浴びることはありませんでした。「拭く」という作業で使われ、捨てられる地味な存在の紙に光を当てるために、私はこれからも研究を続けます。

(2017年10月25日取材)



家庭紙